

定点観測
成田重行流
「地域開発の戦略学」
2

大島と緑の真珠

東日本大震災が起きた2011年3月11日。この日をきっかけに、地域プロデューサーの成田重行さんは、それまでの仕事を一時中断して、宮城県気仙沼市の大島に通い詰める決心を固めた。20年来にもなる友人や知人の安否に加え、彼ら彼女たちと島の行く末が心配になったからだ。震災から5年近くを迎えた離島に住む人々と成田さんの復興に向けた物語を描く。

文・撮影／窪田新之助

生命のみなもと 豊穡の海

大島に生まれた詩人の水上不二（1904～1965）はこの辺りの海を次のように詩った。

海はいのちのみなもと
波はいのちのかがやき
大島よ
永遠に緑の真珠であれ

本連載の第一話で紹介したように、成田さんはこれから開発する地域に初めて足を踏み入れると、まずやること有三つある。その一つが高台から町並みを眺めること。鳥の目になってその土地の様子を確かめることで、その生活や習慣が把握できるといふわけだ。

それに倣ってホテルから眼下を望むと、圧倒されるのは漁港としての規模の大きさだ。何しろ気仙沼港の年間水揚げ高は17億円と金額ベースでは県内トップ。全国レベルでも10位以内に君臨してきた。カツオやサシマ、カキやホタテなどが気仙沼や指呼の間にある大島の人々の生活を潤してきたのだ。

この詩にある「緑の真珠」について、成田さんは「豊穡さを表す言葉だと解釈している」と話す。同様に、気仙沼で養殖業に従事してきた京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授の畠山重篤さんは「森は海の恋人」と主張してきた。森の滋味分が川を通じて海に流れ込んでプランクトン（浮遊生物）を育て、さらにはプランクトンが魚介類の餌となって豊富な漁場を生み出し

静かな海である。晴れ渡った空の下、どこまでも深い碧さをたたえ、ゆったりと落ち着き払っている。そんな豊かな生命の母のもとで憩うように、港の向こうに広がる海の上で、カモメたちは羽を休めていた。

東京駅を出発したのは午前7時過ぎ。途中、JR東北新幹線の一ノ関駅で乗り継ぎのため1時間近く待たされるなどしながら、4時間半かけてJR大船渡線の気仙沼駅にようやくたどり着いた。

といっても目的の大島はまだ先であった。駅からタクシーに乗って5分ほどの気仙沼港に到着したものの、ここでさらに40分待つことになったのだ。

せっかくなので、港のそばの高台に立つホテルに入って、そこからの眺望を楽しむことにした。

プロフィール

成田重行（なりた しげゆき）
1942年生まれ。70年立石電機（現オムロン）入社。91年同社常務取締役、2001年ナルコーポレーション代表。地域プロデューサーとして、全国30カ所の市町村で地域の活性化を支援してきた。05～09年スローフードジャパン副会長、2000年中国国際茶文化研究会名誉理事。多摩大学、立教大学、東北福祉大学などで講師・教授を務めた経歴もある。



大島と緑の真珠



気仙沼から大島に向かう船に乗り込む人やトラック

ているのだ。そのことを熟知している大島の漁師たちはみな、昔から山に木々を植えてきた。

ホテルから眺望していると、この町が再建中であることもよくわかる。道路や建物、防波堤などは真新しくかったり、工事中だったりする。震災前、この辺り一帯は水産加工場がずらりと並んでいたそう。何しろ震災前には年間10万tを超える水揚げ高を誇ってきた漁港である。水産加工場では、水揚げされたばかりの魚を開きにしたり、缶詰にしたりしてきた。

「気仙沼ちゃん」と仲間たち

ホテルからの眺望をひととおり楽しんだところで、再び港に向かった。

そこで私たちが乗り込んだのは大島との間を毎日16往復するという定期船。大きな船に人やトラックなどが次々に飲み込まれていく。客室に入ると、すぐ後から団体が乗り込んできて、私たちの近くに座った。動き出した船内で何とはなしにその話を聞いていると、「津波はあの山のあの辺りまで達した」「ずいぶんと元に戻ってきたよね」などと口にしていく。

大島には15分ほどで着いた。そこで出迎えてくれたのは成田さんの古い友人である水上俊光さん。細身の身体と優しい笑顔からは想像できなかった現役の漁師である。光っているきれいな眼が印象的だ。

水上さんの運転で向かった先は、初日の宿泊場所である民宿「アインス くりこ」。大島で最も人気の宿である。なぜかといえは「気仙沼ちゃん」が夫婦で経営している民宿だからだ。

年配の方ならご存じだろう。気仙沼ちゃんは1970年代後半にコメディアン萩本欽一の番組で活躍した元アイドル。インターネットで調べると、アイドル時代には東北弁とその明るさで人気を博したというが、いまもそれは変わらない。類は友を呼ぶではないが、従業員たちもさわ

やかな風が吹き抜けるような人たちがかりである。宿名の「アインス」はドイツ語で「お客様が一番」の意味だそう。その言葉どおり、ここに滞在すれば、これ以上はない親密で温かいもてなしを受けられる。そんな接客をしてくれる気仙沼ちゃんや宿の人たちに出会いたくて、民宿には県内外からいろいろな人たちが訪ねてくる。

その最たるはエンジンの修理などを仕事にしている関勇さんだろう。関さんは毎年、自宅のある群馬県桐生市からキャンピングカーに乗ってやってきて、数週間にわたってこの民宿に滞在する。驚くことに、そのキャンピングカーの前後左右には「くりこ」という民宿名と一緒に、その電話番号までがデカデカと書いてある。全国を走り回る無料の宣伝カーだ。

たまたまこの日も関さんの滞在期間に重なっていた。このほかに元漁師でいまは「くりこ」で働く清水洋佑さんも交えて、私たちは雑談を始めた。かつて遠洋漁業で世界を旅した話を聞くと、水上さんも清水さんも我先にと話してくる。その武勇伝に耳を傾けていると、みんな笑顔が



気仙沼港から15分ほどの距離にある大島

こぼれてくる。だが、話はいつとはなしに震災当時のことになっていった。

自然を失った漁師の暗闇に沈んだ悲しみ

清水さんは震災当時、気仙沼市街地の病院で入院している実母に付き添っていた。看病の期間が長引くことから、清水さんと奥さんは気仙沼港がある「本土」側にアパートを借りていた。

あの日、奥さんがアパートで留守番をしていた。地震が起き、すぐに津波がやってきた。アパートは流され、奥さんは行方不明になった。奥さんの行方がわからぬまま、実母を看病したものの、3月19日に病院で息を引き取ったという。それからしばらくして、奥さんの亡骸が見つかった。

水上さんは成田さんが最も長いこと心配した人だ。その仲が始まったのはおよそ20年前にさかのぼる。当時、東北福祉大学で特任教授だった成田さんは、大学のある講座に参加していた水上さんと出会った。それは気仙沼の郷土料理や食と健康との因果関係などを学ぶというものであった。

その講座は現在に至るまで続き、成田さんと水上さんの縁は深まっていった。

震災直後、成田さんは水上さんに何度となく電話をかけた。だが、まったく出てくれない。携帯電話はもちろん、自宅にもかけた。そんな状態が、2カ月も続いた。

「水上さんは深い暗闇の中にいたんだよね」

成田さんは静かに語る。水上さんは当時の心境について「大事にしていた自然が壊されたことが本当に悲しかったんだ」と振り返る。

時代の流れは変わっても海で生き続ける

水上さんは10代で漁師になった。「人の後ろを歩くのは好きじゃない。誰もやったことないことをするから面白いんだ」

そう語る水上さんは未開拓の漁場を求めて、遠方はペルー沖まで進出していった。

当時の面白い話や勇ましい話を挙げれば切りがない。自宅にお邪魔したときに水上さんが持ってきた写真には、昭和40年ごろ、南米のある国で撮影した船員たちの姿が映っている。彼らの前には細長い物体がやたらと並んでいる。

写真はカラーであるものの、古いカメラで撮影したもので、色はかなりぼんやりしている。ただ、いやだからこそ、いずれの物体もその真ん中は真っ赤な点だけが際立っている。じつと見ていて、ようやく気づいた。赤いのはワニの口であり、細長い物体はワニの剥製だ。こいつを土産に100体だとか200体だとかを買い込んでいたという。何しろサラリーマンの何倍も稼いでいた漁師たちである。金の使い方も豪快なのだ。

ただ、時代とともに各国は排他的経済水域を設けるようになり、資源

管理のために海外漁船を締め出すようになった。水上さんも活躍の場を遠洋漁業から近海漁業、さらには沿岸漁業へと移していった。

そのうち水上さんは観光船「俊洋丸」の運営を始めることにした。そのひとつは子どもたちを対象にした「無人島クルーズ」。大島からさらに太平洋側にある無人島を周遊しながら、「海の畑」と呼んでいる養殖場で採ったカキやホタテを船上で味わったり、釣りや船上でバーベキューをしたりする。この仕事は水上さんの新たな生きがいになった。

「とにかく子どもたちと遊ぶのが最高。大人と付き合っているよりずっといいよ」

都会の子どもたちにとってみれば得がたい楽しい経験である。水上さんの自宅には、参加した子どもたちから、次のような手紙が頻繁に届く



船に乗ってホタテやホヤの養殖場に向かう水上さん



大島は漁業の島だ

ようになった。

「水上さんへ 水上さんお元気ですか。ぼくは気仙沼小学校の五年生です。先日は、地引き網でお世話になりました。地引き網の指導や魚の話ありがとうございました。ぼくは魚の話を聞いて魚のことを深く考えるようになりました。では、これからもお元気で過ごしてください」

「漁師さんへ この間は、貴重な体験ありがとうございました。わたしは、船に乗ったことがなかったので、とても楽しかったです。漁師さんにはとてもお世話になりました。この時期は、スイカは高いのに、もってきてくれたり……。スイカとてもお

大島と緑の真珠



水上さんが小学生との遊び場にしていた砂浜。地震で辺り一帯が陥没し、砂浜も小さくなってしまった

いしかったです!! 地引網も初体験だったのでもいい思い出になりました。本当にありがとうございます」

子どもたちが夢を託せる先輩として

あの日、そうした思い出が詰まった大島の自然を津波が破壊した。そのショックは筆舌に尽くしがたい。破壊された自然を見ているのはあまりに辛い。だから、水上さんは大島を離れ、息子夫婦が暮らす千葉に移住しようと思うようになっていた。水上さんがそうした悲しみの淵にいたことを人づてに聞いた成田さんは、電話の代わりに手紙を何通も送ることにした。とくに書いたのは子どもたちのことだ。

「海での仕事を辞めて、千葉に行つてどうするの。自分だけならいい。でも、水上さんは子どもたちの夢を持った一人の先輩なんだよ。陸に上がってしまったら、子どもたちは悲しむじゃないか。そんなことを延々と書いたんだ」

成田さんが言うとおり、水上さんは「子どもたちの夢を持った一人の先輩」である。たとえば、不登校だったある女子中学生は、「俊洋丸」に乗ったとき、「操縦させて」と水上さんにせがんできた。それまで口を利かず無表情だったのに、操縦を始めるのと笑顔を見せた。この体験がきっかけとなり、その中学生は船乗りを目指すことになった。水産学校を卒業し、いまでは海上保安庁の船員である。

水上さんは成田さんの手紙を読んでそんなことを思い返しながらか、こう感じたそうだ。

「成田さんの手紙で気づいたよね。やっぱり子どもたちと離れることはできないって。子どもたちとの関係は手紙を通じてずっと続いているんですよ。やっぱり大島こそ人生の樂園なんだよね」

がれきの中にあつた希望の光

東京から大島へ向かう道中、地域

開発の条件について、成田さんが私に繰り返し語っていたことがある。それは「外的環境なくして地域は変われない」ということ。

水上さんが暗闇から戻ってきた話を聞いて、私は人も同じだなと思つた。水上さんが立ち直れたのは、子どもたちのためである。もちろん成田さんは承知していたのだ。だから、水上さん宛ての手紙に「水上さんは子どもたちの夢を持った一人の先輩なんだよ」と書いたのである。

大地震が起きた春は過ぎ、やがて夏がやってきた。成田さんは毎月のように大島に通いながら、どうやらこの地域が活気を取り戻せるかばかりを考えていた。

ひとつ希望を託していたことがあつた。ソバである。成田さんはソバの栽培から打ち方までとても詳しい。NHKで長いこと番組を持っていたほどだ。ソバに関する著書もある。しかも、全国でソバによる地域開発を手がけた経験もある。ソバで島の人たちの気持ちを盛り上げることでできるのではないかと思つた。

といつても大島は漁業の町である。農地はわずかしかない。ただ、成田さんは住民たちから面白い話を聞いていた。それはこの島ではかつてソバが盛んに栽培され、常食してきたということ。



左から関さん、水上さん、成田さん、清水さん、「くりこ」の主人である白幡修さん

2日目の晩、私は村の古老である水上忠夫さんに、そのことを尋ねてみた。忠夫さんは市議会議員や漁協の理事などの重職を務めてきた人物である。その忠夫さんはこう証言した。

「この島を埋め尽くすほどのソバ畑だった。それだけ食べていたんだよ」

震災のあつた年の8月初め、成田さんは日課である散歩をしていた。そのとき、見つけたのである。白くて可憐な花を咲かせているなじみの植物を。見まごうはずもない、ソバだったのだ。成田さんは思わず駆け寄っていった。闇の中に一筋の光を見た思いがしたのだ。(続く)